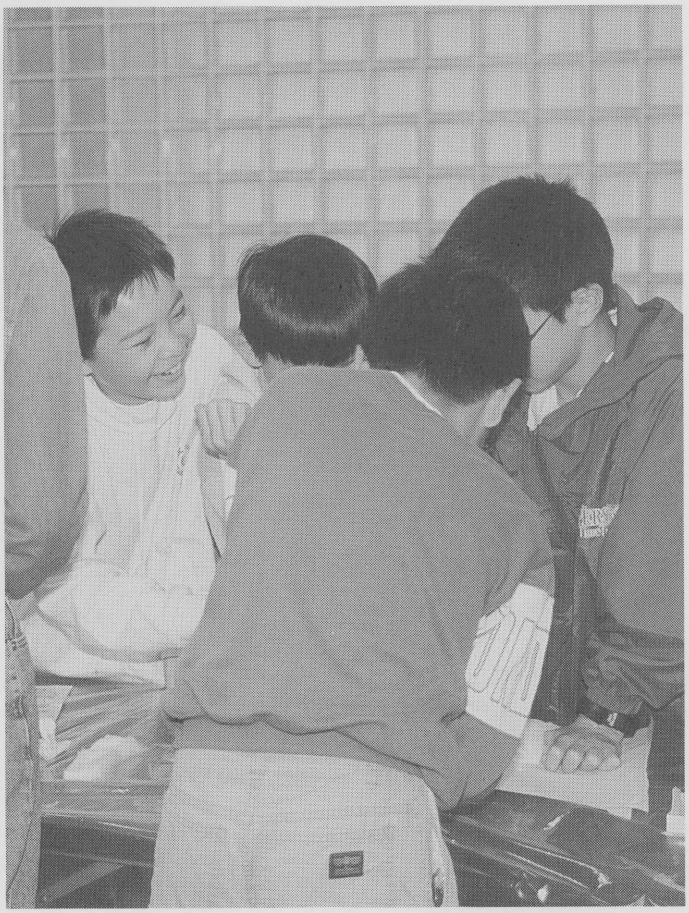
THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA CITY MUSEUM

# 西宮市立郷土資料館ニュース　第20号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662　電話0798-33-1298



土よう展示室

目次 CONTENTS

特別展「発明とデザイン－近代の民具－」（合田茂伸）…2

最近の「土よう展示室」の傾向について（俵谷和子）…5

寄贈資料一覧…7

西宮市立郷土資料館ニュース総目次（第1号～第20号）…8

# 特別展「発明とデザイン－近代の民具－」

1996年８月１日から８月31日まで

合田茂伸（当館学芸員）

## １．当館における民具の収集

西宮市立郷土資料館では民俗資料として民具を収蔵している。当館に収蔵されている民具のうち、開館前に収集されたものは、当初、学校教育の教材として収集された側面があり、かならずしも良好な聞き取りをともなう理想的な民俗資料ではないものがある。また、開館以降数年間は、民俗学を専攻する職員を配置していないので、十分な調査にうらづけられた収集をおこなうことができなかった。これを補完するかたちで、その後の特別展、企画陳列などの機会において集中整理、意義づけをおこなってきた。1995年1月の地震によって損壊した家屋から大量の家具や農具、食器、衣料などがはきだされ、地震直後の興奮状態のなかでそれらが当館に搬入されてきた。それらは、家屋の解体に並行しての収集や、当主が死亡した家での収集など困難な資料収集状況がすくなくない(1)。このような状況では十分な聞き取り調査をはたせないことがおおい。現在、当館に登録されている民俗資料5814点のなかには、そのような資料が相当数存在する。

それらは、第一級の民俗学資料とはいえないかもしれないが、西宮市民がつたえてきた道具であることにかわりない。道具自体に文字がしるされていて、それから、製作者、製作地、製作年、使用年、販売者、購入年、所有者、所有地、使用者、使用地などをしることができるものは、豊富な聞き取りがなくても博物館資料化が可能である。それらは、聞き取りによる十分な伝承をともなう民具としての展示をおこなうことには困難なことがあるが、一定の地域で収集され、文字記録を有する道具そのものとしての展示には十分たえることができるとかんがえる。そのような展示として「発明とデザイン－近代の民具－」は企画された。

## ２．発明とデザイン

産業の近代化は大量生産品をうみだしたが、その生産には、殖産興業のためにもうけられた特許制度や、あたらしい生活様式、あるいは、産業や国民生活の合理化、標準化がつよく影響している。この特別展では、「発明とデザイン」をキーワードとして、近代の民具の特性についてかんがえてみる。

(1) 特許制度のはじまり

特許制度は、発明者の研究成果を保護し、すぐれた技術、知識を公開して、技術の進歩、産業の発達に役立たせることを目的としている。

はやく、明治4年には「専売略規則」として発明についての法律が公布されたが、翌年には廃止されてしまった。日本の特許制度は、特許権としては、明治18年に実施された「専売特許条例」にはじまり、その後の法体系の整備、改正をへて、今日の「特許法」にうけつがれている。その年の出願が425件、翌年が1384件であった[2]。機は熟していたのである。そのほか、実用新案権は、明治38年に公布された「実用新案法」、意匠権は明治21年の「意匠条例」、商標権は明治17年の「商標条例」にはじまる法律で保護されている。

特許制度創設以降、生産される道具・機械の大部分は、これら工業所有権にかかわる法律の保護と規制の対象になってゆく。すでに指摘されているように、特許関連資料は近代における物質文化の多様性とそれからみた考案者たちの創造力をしるには、重要な手がかりとなる[3]が、いっぽうで、すべてを歴史研究の資料とするには難点がある[4]。

(2) 農具の商標

農具は、江戸時代以来顕著なくふうや改良がかさねられてきた製品で、とくに、千歯こきや唐箕、万石とおし、土臼など、やや複雑な構造をもつものには、製作、販売した者の屋号や商標のあるものがおおい。「大阪農人橋　京屋」の唐箕のように、有名ブランドとして名をはせた農具がある。明治になって発明された足踏脱穀機や、中耕除草機、製縄機は、回転する歯そのものや、回転機構などにこまかいくふうがかさねられ、特許、実用新案のオンパレードである。

「大坂農人橋　京屋」製の唐箕は、江戸時代のおわりころには、近畿地方にひろくゆきわたり、唐箕の一大ブランドであったことがしられる[5]。ところが、「京屋」は大阪農人橋だけではなく、大阪近郊の町や村にあったことがしられている[6]。西宮にも「大社村廣田本家京屋治兵衛」があって、現西宮市大畑町7付近とつたえられる。「京屋」がブランドをひろげたものか、ブランドを盗まれたものであるのか、興味深い。

(3) 生活の改善－健康な生活のために－

明治末から昭和初めにかけて、急速な工業化がすすむなかで、都市にすむ市民が形成されてくるが、その住環境は劣悪であった。郊外住宅地の開発や、都市計画の実施などがおこなわれたが、家庭内でもまた、生活の改善が提案された。そのキーワードは、「一家団らん」と、「健康な生活」である。生活改善提案は、都市にはたらくサラリーマン家庭の

ため、生活の合理化、洋風化をすすめようとしていたが、おおくの家庭では、たとえば、箱善を「卓子（折脚）」（いわゆるオゼン・チャブダイ）[7]に、ろうそくをランプ、電灯に、こたつをやぐらこたつにおきかえ、蠅取り器をそなえるものであった。それらには、卓子の縁の角をとりさって丸みをもたせたり、ガラスの飾窓をとりつけるように、軽快な洋風のデザインを指向したものがある。

(4) 国民生活用品－生活の標準化－

生活の改善は、それの洋風化、合理化を指向していたが、それは生活の合理化であると同時に生産の合理化を意味していた。工業による大量生産システムは、生産、社会をささえてゆくための合理性、効率性の追求という哲学を提供したのである。

1930、40年ころから、生活改善運動は市民生活を標準化する[8]ことで、社会、産業の効率化をすすめるという方向にむかう。そこには市民の生活改善という思想はみられない。明治末ころから形成されてきた市民が「国民」に再編成されてゆくのである。1940年代には商工省工芸指導所は国民生活用品をデザインして国民に提示し、国民服が義務化され、厚生省が婦人標準服を発表する。

註）

(1) 土居佳代　1996年「震災と民俗資料」『西宮市立郷土資料館ニュース』第19号

(2) 特許局　編　1934年『特許局五十年史』

(3) 近藤雅樹　1995年「近代における民具の変容　脱靴器をめぐって－特許・実用新案公報の調査から」『民博通信』第68号

(4) 山口昌伴　1991年「2　チャブ台の正体－その姿と形の変遷とその意味」『国立民族学博物館研究報告　別冊』16号

(5) 小谷方明　1982年『大阪の民具・民俗志』

(6) 近藤雅樹　1992年「紀年銘唐箕の形態分類」『国立民族学博物館研究報告』16巻4号

(7) 石毛直道・井上忠司　編　1991年『現代日本における家庭と食卓』（国立民族学博物館研究報告　別冊16号）

(8) 柏木　博　1996年『芸術の複製技術時代』（岩波　近代日本の美術９）

# 最近の「土よう展示室」の傾向について

俵谷和子（当館嘱託）

## 1．はじめに

「土よう展示室」は、小学生のみなさんにむずかしげな言葉のならぶ解説板ではなく、資料を展示ケースから取り出して、体験を通して郷土の歴史や文化に触れてもらおうという思いからはじまりました。本年度で７年目を迎えますが、毎回20人から50人をこす参加者があり、多くのかたに関心をもっていただいている事業の一つといえます。

昨年度も６回おこないましたが（別表参照）、震災後ということもあり今までとはちがう傾向がさまざまみられました。そのひとつには、参加者の激減があげられます。そこで、具体的に第４回「拓本をとってみよう」第６回「史跡ハイキング」について報告することで、また「土よう展示室」に興味をもっていただけたらと思います。

## 2．「拓本をとってみよう」

一般に「拓本」ということばをきいたとき、おおくのひとは「魚拓」を思い浮かべるのではないでしょうか。「拓本」は、昔の印刷技術でそのままを写し取ることがたいせつなので、写し取りたいものに直接墨をつけるのではなく、紙をしいたうえから墨をつけていく間接法です。そのための技術を実際に体験してもらいました。また、「拓本」が、文化財保護・保存に役立っていることも知ってもらおうと企画しました（１ページ写真）。

参加者は、開始時に高齢者４人でしたが、少し遅れて小学生（子どものみ）４人が参加しました。拓本の簡単な歴史・種別・利用方法・とり方に関するプリントを配布し併せて簡単に説明した（６～７分）後、比較的方法の簡単な乾拓から始めました。参加者は全員拓本は初経験でした。そのため「拓本」の方法論だけ学んだ場合、逆に文化財を傷付けてしまう恐れがあるとの懸念もありました。そこで、画仙紙は破れた時点で新しいものと替えてもらい、対象物を汚さないことの重要性を繰り返し説明しました。また、資料館の職員が４名待機していたので、参加者一人一人の横について詳細に説明を行なうことができ、参加者が戸惑うようなことはありませんでした。技術を伝達する場合、人数が多いというのは、主旨が伝わりきらない危険性があることがわかります。

さて、震災後は、広報活動の伝達が不十分であるのか、普及活動に対する関心希薄の傾

向にあるのか、全員当日の館内放送を聞いて参加したという状況でした。そのため、開始時間は館内で行う場合、午後からの設定の方が参加しやすいようでした。小学生は途中参加でしたが高学年であったこともあり、「拓本」と版画との違いや方法についての理解も早く、積極的に様々な対象物に挑戦していました。なかには、釣り鐘型の墨を拓本にとれないかと試みている子どももいました。参加したみなさんは「拓本」にずいぶん興味をもたれたようで、材料などの入手方法を尋ねる人もいました。また、参加者が互いに協力しあって石臼の拓本をとることで、小学生と高齢者のコミュニケーションの輪が出来ていたのが印象に残りました。

**3.「史跡ハイキング」**

西宮市内には、国・県・市指定の文化財が多数ありますが、阪神・淡路大震災による影響で大きな被害を受ました。そのうち、比較的被害の少なかった文化財を見学し、身の回りの中にも多くの史跡があることを発見してもらい、郷土への関心を高めてもらうことを目的としました。コースは、阪急仁川駅を出発し、関西学院大学構内古墳、上ケ原用水路、仁川五ケ山古墳2号墳・3号墳、仁川弥生遺跡、仁川五ケ山西1号墳を経て甲山神呪寺で解散と設定しました。各見学場所では当館学芸員から説明がありました。

広報活動は、市政ニュース掲載、資料館だよりの配布でしたが、この事業の関する反応は早く、市政ニュース掲載後から電話での問い合わせが相次いぎました。当館で「ハイキング」という試みは初めてで、自由参加としたため人数把握が出来きませんでした。そのため、用意した解説用のパンフレットが不足する状況になりました。

参加者の傾向は、その大半を60代以上の高齢者が占め、小学生の親子は1組でした。また、はじめ参加者の視点は「歩くこと」に重点が置かれている感がありました。ハイキング熟練者の方と初心者の方に少しペースにばらつきがでたのもそのためでしょう。しかし、毎日通る道に身近な文化財があるという発見が、全体のまとまりをうんでいましたし、次回開催への要望を多数いただくことができました。

**4.おわりに**

全体を通して高齢者の歴史への関心が高く、意欲的な参加姿勢がうかがえました。それに対して、小学生の関心はやや希薄という印象でしたが、自発的参加の姿勢も見ることができました。広報活動は、一般向けとして市政ニュース・資料館だよりで充分に行えていることがハイキングの事例からうかがえました。しかし、小学生に関しては情報の浸透性が推し量れない状況でした。それゆえ、ついつい陥りがちな小学生に関心のあるテーマ・

人集めのテーマを追かけるということを回避し、体験学習が単なる「遊び」に転じてしまわないよう配慮していく必要があります。

また、ここ数年の「土よう展示室」は、「拓本」のように技術を伝えることに重点が置かれすぎる傾向にあります。技術伝達ではなく事業の開催当初の「触れる展示」というかたちにもどす方向も検討しています。

土よう展示室開催一覧（平成７年度）

第１回「綿くりをしてみよう」(6月24日土曜日10：30～12：00）10人
第２回「糸つむぎをしてみよう」（７月８日土曜日10：00～11：30）25人
第３回「脱穀をしてみよう」(10月14日土曜日14：00～16：00）４人
第４回「拓本をとってみよう」(11月11日土曜日14：00～16：00）８人
第５回「史跡ハイキング」（１月27日土曜日10：30～15：00）55人

寄贈資料一覧（平成８年１月～６月、敬称略）

私札２点（藤田卯三郎)、パイプ（雑古秀雄)、しんし張り（中村参治)、満州事変凱旋記念徳利（不明)、布製兜・鉄製兜など22点（白鹿記念酒造博物館)、箕・藁切り・苗籠・籠（松本ふみ子)、昭和20年代音楽教科用図書など359点（西宮市立浜脇小学校)、教科用図書６点（萩原ますみ)、家庭燐寸・自転車用照明・ブリキの玩具・カラン（垣内　保)、金泥唐草紋様薬箱・医術道具箱・紋付ふろしき（大島明人)

ありがとうございました。

## 西宮市立郷土資料館ニュース目次（第１号～第20号）


| 発行年月日 | 号－頁 | 題目　筆者 |
|---|---|---|
| 1987年７月１日 | １－１ | 第２回特別展「教科書その一世紀」　（上田健吉・合田茂伸） |
| | １－３ | 西宮市出土の漁業関係資料について　西川卓志 |
| 1988年１月１日 | ２－１ | 常設展示室の展示替え　（合田茂伸） |
| | ２－２ | 収蔵民具の整理　（行俊　勉） |
| | ２－４ | 「鍛冶為」鍛冶道具の受贈　（合田茂伸） |
| 1988年７月１日 | ３－１ | 第３回特別展「道・旅・宿場」　（西川卓志） |
| | ３－２ | 五ヶ山古墳群第１号墳および第２号墳出土の馬具　合田茂伸 |
| 1989年１月１日 | ４－１ | 郷土資料館入館者数の動態　（西川卓志） |
| | ４－２ | 甲子園口遺跡出土の弥生土器　合田茂伸 |
| 1989年７月１日 | ５－１ | 第４回特別展「たがやす、まつる。」　（西川卓志） |
| | ５－２ | 大正３年のワリコと心願講・長生講　井阪康二 |
| 1990年１月１日 | ６－１ | 郷土資料館と体験学習　（屋代鶴夫） |
| | ６－３ | 資料紹介「桜戸雑話」　池田直子 |
| 1990年７月１日 | ７－１ | 第５回特別展「西宮の絵馬」　（合田茂伸） |
| | ７－２ | 西宮市立郷土資料館蔵の踏車　東原直明 |
| 1991年１月１日 | ８－１ | 「土曜てんじ室」について　西川卓志 |
| | ８－２ | 西宮市における古文書の現状と課題　大崎正雄 |
| 1991年７月１日 | ９－１ | 第６回特別展「西宮の職人たち」　西川卓志 |
| | ９－２ | 西宮市塩瀬町名塩の年中行事抄　井阪康二 |
| | ９－５ | 小学生と「木製石庖丁」　合田茂伸 |
| | ９－７ | 初誕生の時のゾウリ　土居佳代 |
| 1992年１月１日 | 10－１ | 地域理解と国際理解－「親と子の郷土史講座」について思うこと－　古岡俊之 |
| | 10－４ | 農作業にはく皮ぐつ「綱貫」　井阪康二 |
| | 10－７ | 阪倉氏所蔵「『語意考』部分・ともひ詠草真淵添削・由来書」掛幅について㈠　池田直子 |
| 1992年７月１日 | 11－１ | 第７回特別展　郊外生活のすすめ1900/1950　合田茂伸 |
| | 11－３ | 西宮市内の漁業について－地曳き網漁から船曳き網漁へ－　土居佳代 |
| | 11－８ | 阪倉氏所蔵「『語意考』部分・ともひ詠草真淵添削・由来書」掛幅について㈡　池田直子 |
| 1993年１月１日 | 12－１ | 常設展示室の展示学　西川卓志 |
| | 12－３ | 西宮市における石造遺品について－補遺－　坂田磨耶子 |
| | 12－７ | 西宮築洲勧進帳と絵馬　井阪康二 |
| 1993年７月１日 | 13－２ | 特別展「銅銭の考古学」　西川卓志 |
| | 13－４ | 甲子園口遺跡出土の須恵器と土師器　合田茂伸 |
| 1994年１月１日 | 14－５ | 盛徳講「おかげ施行控」について　池田直子 |
| | 14－６ | 西宮の漁業～浜戎まつりについて～　土居佳代 |
| 1994年７月１日 | 15－２ | 特別展「八十塚発掘」　合田茂伸 |
| | 15－４ | 西宮の地蔵盆　土居佳代 |
| 1995年１月１日 | 16－２ | 教科用図書収蔵の現況について　上田清二 |
| | 16－５ | 鳴尾の一本松とエビス神の伝説について（上）　井阪康二 |
| 1995年３月31日 | 17－２ | 西宮市立郷土資料館の兵庫県南部地震による被害状況　（合田茂伸） |
| | 17－４ | 鳴尾の一本松とエビス神の伝説について（中）　井阪康二 |
| 1995年７月１日 | 18－２ | 開館10年を経過した郷土資料館～西宮市立郷土資料館第10回特別展～　西川卓志 |
| | 18－５ | 鳴尾の一本松とエビス神の伝説について（下）　井阪康二 |
| 1996年３月１日 | 19－２ | 西宮市における古文書の現状と課題　大崎正雄 |
| | 19－５ | 郷土資料館の企画陳列　合田茂伸 |
| | 19－６ | 震災と民俗資料　土居佳代 |
| 1996年７月１日 | 20－２ | 特別展「発明とデザイン－近代の民具－」　合田茂伸 |
| | 20－５ | 最近の「土よう展示室」の傾向について　俵谷和子 |


西宮市立郷土資料館ニュース第20号　1996年（平成８年）７月１日発行